

石積み職人——栗田純司【後編】



新名神高速道路沿いにある東海自然歩道で、栗田氏の手により「穴太積み」の石垣が新たに積まれた。

戦国時代、全国各地の城の石垣を築いた

「穴太衆」の技を唯一現代に伝える栗田家。

重要文化財や国宝級の石垣の修復にあたる一方、

現代の構造物と調和する新しい石積みにも挑戦している。

受け継がれるべき貴重な技術「穴太積み」の

置かれている状況、次世代への承継、

そしてその石積みの方法・手順について、

十四代目の栗田純司会長に語ってもらった。



一線から身を引いた今も、かつて隆盛を誇った「穴太衆」の末裔として、その石積み技を次世代に伝える責任を感じている。

「穴太積み」を取り巻く現状

「われわれが一番重要視しているのは、自然石を使うこと。割石・切石を使わないで積むことが、『穴太流』なんです」

積みやすいように加工した石を使わない、ということ、当然ながら石積みにもそれだけ高い技術が求められることになる。一般的に「野面積み」とも呼ばれ、前編で紹介した安土城の石垣はその代表格。見た目は不ぞろいだが、排水性・耐久性に優れ、築城から数百年が経過してもその形を保っている。

一方で、石垣には、上部構造物や内部の土、

浸み込んだ雨水などによって常時圧力がかかる。この圧力で積まれた石が徐々に飛び出し、ふくらんでしまった状態を「孕み」という。この「孕み」を修復するのも石垣職人の重要な仕事だ。

「今の文化財の石垣の仕事はこの『孕み』の修復が多いんですが、『孕み』を直すには、事前に墨を引いておいて、一度解体してまた元通り積み直すだけではない」

つまり、「孕み」の修復は不定型な石を一から積むわけではないので、一般的な土木業者でも施工できてしまうし、石積み技術向上にもつながらない……というのが栗田会長の心配の種だ。

「新たに石を積むには、ものすごく技術がいる。それをみんなマスターできてないし、その機会にも恵まれてない、というのが現状です。私の目から見ると『ちゃんと積めてるな』と思うのは、息子を含めて四人だけです」

「大学出たから父に弟子入りした私と違って、息子は中学卒業してすぐ、十五歳から修業してからです、その分一人前になるのも早かったです。私は『石の声を聴いた気がする』と言いましたが、息子は『おじいちゃん（先代の人間国宝・栗田万喜三）の声がかえる』と言うてました。まあ声がかえるといっても積み方はそれぞれ。正しいかどうかは二百年後、三百年後に孕んでくるかどうかで決まるもんです」



あわた・じゅんじ●1940(昭和15)年、滋賀県生まれ。父・粟田万喜三は穴太積みの人間国宝。大学卒業後から父の下で修業する一方、1964年に会社(粟田建設)を設立。現在は15代目に当たる長男・純徳に社長を譲り、文化財石垣保存技術協議会の会長も務める。平成12(2000)年に「現代の名工」として表彰される。

「穴太積みには
マニュアルも正解もない。
正しいかどうかはわかるのは
二、三百年後です」

自然石をそのまま積む、という技術

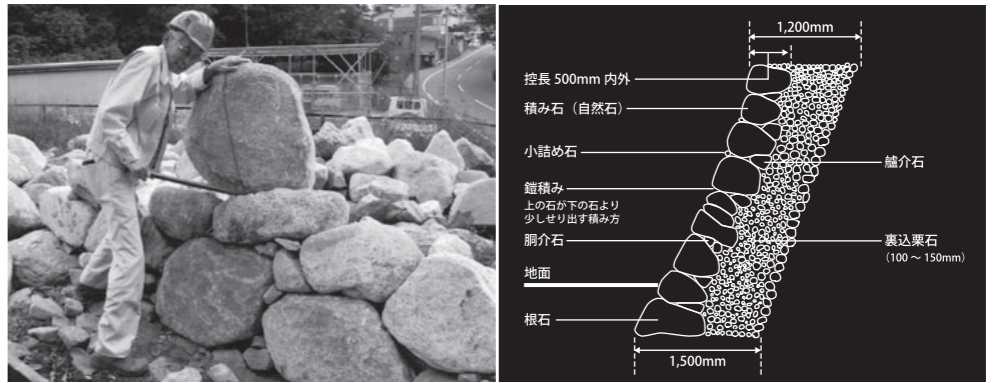
何もないところに、全く加工していない自然石を積み上げる「穴太積み」。具体的に、どんな手順で積んでいくのだろうか。

「まず、集められた石を二、三日かけて自分の足で見て回ります。それこそ檻の中の熊のごとく(笑)、ぐるぐるぐるぐる……。どういう大きさか、顔はどんななか、見ながら頭の中に入れていくんです。で、『この石やったらこの辺に置いたらええかな』『これはここに使おうかな』という具合に、頭の中で完成図を描いていくわけなんです。そこまでできて、初めて『よしや、これで積んでみよう』ということになる」

集められた数々の石の大きさ・形状などを記憶し、それらをどう配置して積み重ねていくかを全て脳内で計算する…。高性能コンピュータも顔負けのシミュレーション能力だ。

「積み始める時も、大きい石ばかりそろってたらええんですけど、自然石だからそうもいかない。最初に大きな石をいくつか置いて、その上に小さな石、次の大きな石はすぐ真上じやなしにちよつと離して置いて…そういう見た目のバランスが強度の上でも意外と大事なんです」

そして、穴太積みの象徴的な工法が、「布積み」と呼ばれる積み方。



右/ゆるやかな勾配、鏝積み、栗石…穴太積みの工夫は、現代工学の観点からみても極めて理にかなっている。左/隙間が多いことも穴太積みの特色の一つ。内部に水が溜まらないため、長期間強度を保持できる。(写真: 株 粟田建設)

まう。それを防ぐためのものなんです」

「石垣の途中に挿しておく『小詰め石』という石、これは力がかかってないから構造的にはなくてもかまわん石なんです。穴があいてると見栄えが悪いのと、もう一つは城に登ろうとしてこの石に手をかけるとスポッと抜けて堀に落ちてしまうという、防御の役目もありました」

現在、粟田会長は年三回北海道に赴き、若い

「石を立てずに、横に横に使っていくんです。石と石の隙間の線を縦には通さず横に入るようにしていけば、それぞれの石にかかる力がうまく分散できる。その結果、平べったい布を重ねたように見えるから、『布積み』なんですな」

穴太積みの工夫いろいろ

他にも、穴太積みならではのさまざまな工夫を教えていただいた。

「安土城の石垣はまだ垂直に近いのですが、その後のお城の石垣は緩やかな勾配になってる。これは城攻めの時に敵が途中までは登れても、そこで足止めできるようにしたもんです。さらに時代が下ると勾配が曲線を描くようになりますが、これは直線より曲線の方が強度的にすぐれていることがわかってきたからです」

「穴太積みの石垣の角の部分をよく見ると、上の石の先端が下の石より少しせり出しているのがわかると思います。昔の甲冑のように段々になってるので『鏝積み』といいます。これは比叡山でも見られる積み方、ということ。これは戦とは関係ない。じゃあ何でかという上、上の石が少し出っ張っていることで、雨水が隙間に浸透しにくいんですね。比叡山のように寒い地域では、冬になると石垣の中に入り込んだ水が凍って膨張し、中から崩れる原因になってし

石工職人に自然石での積み方を教えている。

「穴太積みは、うちだけの仕事じゃないと思っ
てます。全国の職人さんに穴太積みを教えて、
広めていかないと…うちがなくなったら、誰も
文化財を修復できなくなってしまうから」

経験と勘で石を積んでいく「穴太積み」。その
神髄を次世代に伝えることの難しさを語るとき、
粟田会長の表情は楽しみに輝いて見えた。



石積み使用する道具